
国際ガイドラインの上手な活用に向けて

関谷紀貴(がん・感染症センター都立駒込病院 感染制御科・臨床検査科)

感染症関連ガイドラインが対象とする領域は、臨床感染症、臨床微生物、感染予防・制御と非常に幅が広い。国内で発表されたガイドラインも数多く存在するが、国外のガイドラインとは内容が異なっていたり、国外で該当する領域のガイドラインが国内には存在しなかったりと、その相異点は国際的なガイドラインを俯瞰しておくことは臨床現場で有用な情報となりうる。一方で、英語での記載に加え分量も多く、短時間で内容の評価と解釈がしにくいという点から、網羅的なキャッチアップは骨が折れる作業となっている。また、過去に質の高い類書が上梓されているものの、数多くのガイドラインが継続的に発表・アップデートされており、フォローアップの必要がある。

このような背景から、本書は2010年以降に米国・欧州で発表された主なガイドラインのまとめとその活用法を共有し、読者個人および各施設における質改善の取り組みに寄与することを目的として作成した。

対象は感染症にかかわる全ての職種を想定しており、英語を読むのが得意ではない、ガイドラインの一部のみ参照したい、といった需要にも配慮した。また、各ガイドラインの事前評価の記載に加えて、記述内容を「診断」、「治療」、「フォローアップ」、「感染対策」、「その他」の5つに分類し、知りたい情報の有無を短時間で把握できるような工夫を加えている。

なお、ガイドラインの推奨を盲目的・画一的に適用することは本質を見誤る危険があるため、十分な注意が必要である。この理由は、David Sackett氏がEBMについて記載した一文“*It's about integrating individual clinical expertise and the best external evidence.*”に集約されている。本文中に述べられている通り、ガイドラインの推奨はエビデンス(論文)そのものではなく、“採用されたエビデンスの質+専門家による推奨度”の複合体として表現されている。これは、ガイドラインの推奨を現場で適用する場合、個別の患者・施設状況を加味して、使用する個人・組織による解釈が必要であることを意味している。時にガイドラインの推奨ではなく、採用されたエビデンス(論文)までさかのぼって吟味することが必要な場合もあり、ガイドラインの推奨を金科玉条として扱わない慎重な姿勢を忘れないようにしたい。

本書の作成にあたって、数多くの執筆者に多大なご協力をいただいた。各ガイドラインを精読し、利点と限界を吟味し、専門性を生かしてわかりやすい形でご紹介いただいたことに、心より敬意と感謝を申し上げたい。

感染症関連ガイドラインのアップデートに役立てていただくとともに、国際ガイドラインをわが国で上手に活用する一助となることを願っている。
